

幕末から明治初期における新聞受容

— 竹川竹斎と射和村 —

嶋崎 さや香

はじめに

本稿は、幕末期に登場した新聞という新しい情報媒体を、人々がどのように認識し、利用していたかという問題について、現在の三重県松阪市射和町の豪商であった竹川竹斎の日記を手がかりに検討しようとするものである。

従来、新聞についての研究は、日本の「新聞史研究の流れを決定付けた」といわれる、小野秀雄氏の『日本新聞史』^(注1)にみられるように、新聞発行者に焦点が当てられてきた。新聞の受容者側についての検討としては、山本武利氏の『近代日本の新聞読者層』^(注2)があるが、これは近代日本の有力な新聞の読者層について、階層に分けて検討するとともに、発行部数や販売部数などを総合的に調査したものである。しかし、東京を離れた一地域に住む新聞読者が、どのように新聞メディアを認識し、活用していたのかなどの、具体的な検討はなされていない。

幕末から明治初期にかけての変動の中で、人々はどのように情報を手に入れ、活用していたのだろうか。都市部に住んでいることと、そこに住む人々の政治への関心の高まりは必

ずしも比例せず、同時期の様々な地域で、多様な階層の人々により情報収集が行われ、政治的な関心が高まっていたことは、先行研究ですでに指摘されている。^(注3) 地方における新聞受容のあり方を明らかにする事は、単に一地域の枠内に留まるものではなく、メディア史的、近代政治史的にも重要な論点となるはずである。^(注4)

本稿では、松阪市射和町という、地理的に東京や京都などの「中央」から離れた地域に拠点を置いた竹川竹斎を中心として、彼の新聞認識の変化を追うとともに、彼を取り巻く人々がどのように新聞情報を受容していたのかを検討していきたい。

一 竹川竹斎と射和

竹川竹斎は、文化六（一八〇九）年に両替商を主業として、幕府の為替御用方をつとめた豪商、竹川家一族の東竹川家に嫡男として生まれた。のちに東竹川家七代目の当主となり、隠居後「竹斎」と号した。父が本居宣長の門人であり、母方の祖父は万葉集研究で著名な荒木田久老であったことなど、国学と縁の深い環境で育っている。また、竹斎は国学の他に

も儒学や農政学、天文地理測量など幅広く学び、射和地域の殖産興業に尽力する一方で、射和文庫を設け、茶道や古美術鑑賞、歌会などの文化活動も盛んに行っている。こうした地域との関わりとは別に、幕府の要人であった大久保一翁や小栗忠順といった人々とも交流があり、彼らの「国防」に関する諮問に答えるなど、射和地域に留まらない人脈を持った人物であった。

竹斎の著書には『海防護国論』や『賤賀雄詰』、『蚕茶楮書』などがあるが、この他に、彼が文政九（一八二六）年（明治十五（一八八二）年まで書き記した日記が現存している。本稿ではこの日記を活字翻刻した『竹斎日記 稿』（松阪大学地域社会研究所発行平成三年（平成十年））を検討対象とし、ことわり書きのない引用はすべて同書よっている。

竹川家は江戸、大阪、京都に店を持つ一方で、当主は射和に在住するという形式を取っていたため、竹斎も射和の自宅が様々な活動の拠点となっていた。竹斎が拠点とした射和地域は、『三重県の地名』^(注6)によると、「櫛田川中流左岸にあり、宿場町でもあった。多気郡相可村とともに櫛田川中流の中心的な村。近世には松阪町と並ぶ商人町として発展した。伊勢白粉で知られる」地域とされている。

^(注7)同地域や竹斎に関する先行研究には、竹斎個人に関する研究と、竹斎が設立した射和文庫についての図書館史からの研究がある。竹斎個人を取り上げた研究の中で、特に竹斎と

幕末期の新聞情報について触れたものではなく、竹斎と新聞との関わりについても、単に「読まれていた」^(注8)とされるにとどまる。

また、図書館研究の側から取り上げられてきたのは、安政元年（一八五四）に竹斎が設立した「射和文庫」である。近世に設立された文庫の中でも、射和文庫は「一般庶民に公開^(注9)」^(注9)という性格を持ったため、「近代図書館の先駆」として評価、検討されているが、新聞についての具体的な検討は為されていない。

こうした中で細井岳登氏は、「射和文庫研究^(注11)序説」で、「明治初年における新聞縦覧所の存在や地域社会における新聞の回覧、講釈などの利用形態、また幕末に新聞という名のメディアが刊行されていた事実は、図書館史や新聞史において既知の事実であるが、これを幕末期まで遡って、利用の具体像を検討する作業はあまりなされていないようである。竹斎たちの「新聞」をめぐる動向は、「近代的メディア」の日本における発達を考える重要な材料となるだろう」と、重要な指摘をしている。新聞という「近代的メディア」が、竹斎という人物にどのように受容され、地域に何がもたらされたのか。本稿では、上述した細井の見解に同意しながら、より具体的な検討を行っていきたいと考えている。

二 日記から見える竹斎の新聞観

二・一「新聞」の語の初登場と英夷への脅威

竹斎の日記に初めて「新聞」という言葉が現れるのは、安政二（一八五五）年四月九日の「昨年英夷長崎へ出候書面并片仮名新聞紙一枚共右大川へ遣頼母様三公様江も被入覧様申遣」である。竹斎は、長崎に「英夷」が出現したという書面とともに、「片仮名新聞紙」を「大川」、「頼母様」、「三公」と呼ばれる人々へ「御覧様」にと記している。竹斎はこの日「鳥羽行」とも記しており、鳥羽藩の役人に会う際に、この「片仮名新聞紙」を持参していたと考えられる。

また、同時期の日記には、

アメリカカ今日鳥羽へ入りしと云（安政二年四月一日）

英船フランス船長崎入津 又下田へ八艘入津風説（安

政二年四月八日）

など、外国船が長崎や鳥羽、下田へ入港している様子が頻繁に記されて、「新聞」の語が外国船の動向とともに、日記に登場している。ただ、「片仮名新聞紙」が、どういった内容であったのか、出版元はどこであったのかなどは現時点で明らかには出来ない。ここでいう「新聞」とは、新たらくニュースペーパーという意味あいの新聞ではなく、新た

に聞いたことなどを紙にまとめた「新聞」であったのではないかと推察される。^(注12)

このように、日記に登場した初期の新聞という言葉が、現在の新聞とは異なっていたことは、「清商船中巨細注進寅九月寅次郎申渡北辺新聞」（安政二年六月二十三日）からも想像される。日記には、清商船に関しての注進とともに、「北辺新聞」の記述が見られる。「北辺新聞」は、越前出身の商人丸屋吉右衛門が、嘉永七（一八五四）年のペリー艦隊の函館来訪の状況について、弓矢処士なる人物に語ったその聞き取りであり、「風説書に近いものである」と考えられている。^(注13)

ここでいう風説書とは「各地の風説を報告した文書」であり、こちらにも「片仮名新聞紙」と同じく、現在一般的な印刷され、広範囲に発信される「新聞」とは異なるメディアであったと考えられる。

こうした竹斎の片仮名新聞や北辺新聞の収集から分かることは、異国船や海防についての情報を積極的に収集していたことである。文久二（一八六二）年二月二十五日には、「上海支那太平事英米は和ニ可成見込中外新報之上ノ論」の記述があり、また同月十二日には「米利堅戦争新聞紙二冊香港新聞九日板和蘭新聞紙返し遣」とあり、海外情報の収集も行っている。これらの情報は、アメリカやイギリスなど外国船の来航という、日本にとっての直接的な脅威に対しての情報のみならず、「太平事」や「米利堅戦争」など、間接的な海外

【表1】

	記載回数
安政2年(1858)	2
3	0
4	0
5	0
6	0
7	0
万延・文久元年	0
2	5
3	8
4	3
元治元年	0
元治2・慶応元年	1
2	4
3	7
慶応4・明治元年	29
2(1、6～月欠)	2
3(日記欠)	0
4	7
5	26
6(日記なし)	—
7	27
8	16
9	44
10	39
11	10
12	11
13(1月のみ)	1
14	12
15	12

情報にも、竹斎が興味を抱き、収集している様子がかがわれる。この「太平事」とは、同時期に清で起こっていた太平天国の乱であり、「米利堅戦争」とは、アメリカ南北戦争のことであると考えられる。

アメリカや清国など、直接日本の国土や海防などと関連しない情報にも、竹斎が新聞を通して関心を持っていたという事実は、射和という一地域に住む人物が、新聞を通じて同時代の世界を意識し始める大きなきっかけとなっていた事を示すと同時に、新聞というメディアが「近代化」の渦の中へ竹斎を巻き込んでいったと考える事も出来るだろう。

外交の情報や、日本の外国との接触のあり様を知ることにより、竹斎にもたらされたものは、鎖国体制のなかでは想像することさえ出来なかった「国外」の認識であり、逆照射さ

れ浮かび上がる「日本国」というイメージではなかっただろうか。

二・二 新聞認識の変化

さて、竹斎にとって新聞を見るということとはどのような意味を持っていたのだろうか。すでに述べた通り、安政二年の日記に初めて「新聞」という語が登場するが、その後竹斎の日記に「新聞」の語が見られるのはそれほど多くない。【表一】は、竹斎の一年分の日記に、「新聞」の語がどの程度記載されているかまとめたものである。ここでは、「新聞」の語の登場回数ではなく、「新聞」の語が記されている日数を数えている。例えば、ある一日の日記に、三回「新聞」の語があらわれていても、日数で数えて、カウントを一回として

いる。また、「新聞」「新文」「よみうり」「日報」等の語であっても、新聞と確定できる場合は数に含めた。

以上の統計から、竹斎の新聞への関心の高さを、年次別に推定する事が可能となり、新聞への関心の高まったと思われる時期について具体的に検討する事で、竹斎にとっての新聞の意味を明らかにしていきたいと考えた。

【表一】を見ると、安政二年の二回以後「新聞」の語があらわれるのは、七年後の文久二年である。文久二年に五回、翌年に八回、文久四年には三回と、回数はそれほど多くない。しかし、慶応四年になると、こうした状況が一変する。それまで一桁だった回数が、二十九回と急増する。登場日数の急増のきっかけは、この年の五月に上野で起こった、彰義隊と新政府軍の戦いであると思われる。

また、全体を通してみると、明治九年の四十四回と明治十年の三十九回が群を抜いて多い事が分かる。特に明治九年には、「熊本暴動」、つまり不平士族の反乱の一つとして現在知られる「神風連の乱」があり、明治十年には、後年「西南戦争」と呼ばれる事件がある。

このように、「新聞」の語が多く登場する年と、その年の事件をそれぞれ見ていく事で、竹斎がそれらの事件に対して、従来の「来翰」「風説」「書」等に並ぶ、新しいメディアとして、新聞を認識していったあり様を、検討していきたい。

二・三 上野戦争

前述したように、「新聞」の語が登場してくるピークは、慶応四年、明治九年、明治十年である。そのうち、まず慶応四年については、特に佐幕派の彰義隊と新政府軍の間に起こった戦争について多く記述されている。竹斎が最初に上野の戦争を知るのには、「風説」による。五月二十五日の日記には、「江と五月十三四五六日大火尤兵火之由 芝边出火風説二候得共炮発ニ而頻リニ戦之また店向來翰ハなし」との記載がみられる。江戸芝边りから出火があり、それが兵火によるらしいこと、十三日から十五日まで続いたことが、「風説」により伝えられる中で、竹斎は江戸店からの「来翰」がないことを気にかけているが、新聞についての記述は見られない。

この風説の数日後には、

山添より十六日出着書来十五日江と上野 戦争大乱之事
聞見（慶応四年六月一日）

昨夜江と廿二日出着之所其後返而穩也（慶応四年六月七日）

とあり、山添と呼ばれる人物から「書」が届き、上野において、「戦争大乱」が起こっていることが知らされ、また、七日には江戸からの情報により、事態が終息に向かっていることが知らされている。「書」の主である山添が誰かは不明で

あるが、竹斎に届けられた「書」は事件のあった直後の十六日に、江戸から出されている。

上野での戦争に関わる記事は、以上の三つの記述のみであるが、最初に上野での戦乱の風説を知った五月二十五日の段階では、「風説」や「来翰」など、従来の情報伝達メディアが活用されており、新聞についての記述は見られない。

しかし、新聞に対しての言及は上野戦争以後明らかに増加する。こうした様子は、上野の情勢の落ち着きを記した日と同じ、六月七日の日記からみられる。

竹口へ出状 新聞忝事 内外新報初より 横浜新聞紙第九
より 御城日誌初泊より □秋雑報初より (慶応四年六月
七日)

新聞夫々御手ヲ入御納可下由忝と存候九十三番ウエンリ
ーイレンルイもしほ草(注17)といふ出し八迄十二へん迄かり候
而見申候右ハ絶版ニ加り不申歟と存候間揃置度存候昨年
より万国新聞横へーリー(注18)か出し申候分八迄昨冬来り居候
跡手ニ入候ハ、近来之処披見いたし度候事 (慶応四年六
月二十七日)

し(注19)のたへ日誌取二遣 (慶応四年八月二十五日)

日記に記されている、「九十三番ウエンリーイレンルイもしほ草」とは、「もしほ草」の発行人であるウエンリーイレンルイの住む番地であり、この他にも「内外新報初より 横浜新聞紙第九より 御城日誌初泊より □秋雑報初めより」や、「万国新聞横へーリーか出し申候分」等の記述も見られる。これらの記述からは、竹斎がこの上野での戦争の後、新聞名や発行人、発行地などを指定し、特定しながら、積極的に収集を行っている様子をみることができるといえる。

竹斎の新聞に対する関心の高まりや、収集方法の変化からは、従来の情報メディアであった「来翰」や「風説」、「書」にならぶ新しいメディアとして、新聞の可能性を認識していた様子が読み取れる。

さらに、日記からは竹斎がどのように新聞を、つまりは新聞に書かれた情報を意識していたかを、うかがう事が出来る。

竹口へ出状 新聞忝事 内外新報初より横浜新聞第九よ
り (慶応四年六月七日)

新聞追々熟読いたし江とニ居ル思ニ御座候 (慶応四年
七月十七日)

杉享二殿 新聞出来候ハ、御遣被下候事納本之事 (慶
応四年九月四日)

竹斎の記した新聞に関しての感想はそれほど多くないが、

「忝事」や「熟読いたし江とニ居ル思」等の記述が見られる。特に、松阪射和という、江戸から遠く離れた土地に住む竹斎にとって、都でしか手に入らない新聞は、貴重で「忝」ない物であると同時に、「江戸ニ居ル思」にさせるものでもあった。

また、新聞という即時性の強い印刷物は、従来の情報メディアと比べて、書式、書面が形式化、権威化され、しかも同時的に広い範囲で通用する「共有性」を持つ。このような印刷されたテキストと手書きのものもたらず印象の違いについては、前者において「テキストがあつかっている材料（内容）^(注20)もまた、同様に完全で、一貫している、という印象がある」というW・J・オングの指摘を挙げることができる。このような、「印刷されたテキスト」であった新聞から、ある種の権威化された情報というイメージを、竹斎もまた受け取っていたのではないだろうか。

二・四 熊本暴動と西南戦争

竹斎が新聞を重要と認識し、積極的に収集している様子は、慶応四年以降も継続してみられる。しかし、先にも述べたように明治九年に四十四回、十年に三十九回と、この二年間に群を抜いて増加する。

明治九年十一月二日、三重松阪中に「熊本土族暴動」の「風説」が広がり、竹斎は事件を耳にする。

去月廿四日夜熊本土族暴動之風説昨日松坂中ニ有之候由承り今日新文着連日追々着 三十一日之分なし 多分沈静也（明治九年十一月三日）

慶応四年の上野の戦争を竹斎が初めて耳にしたのも、やはり「風説」であったが、しかし明らかに異なるのは、耳にした「風説」について新聞で確認し、「多分沈静也」と予測している点である。ここからは、口話コミュニケーションに基づく風説に対して、新聞を情報の真偽を見分ける目安として活用している竹斎の姿が見られる。

もちろん、明治九年の段階であれば、新聞の発行形態や部数などは慶応四年とは大きく変化して^(注21)おり、簡単に比較することはできない。しかしこの新聞を確認し、事件の動向を予測するという行為は、上野で戦争の起きた慶応四年の竹斎の風説に対する反応との大きな違いである。竹斎は重要な事件や、興味関心をもった事件に関しての情報をとりいれるために、新聞を活用するようになっていたのである。

また、竹斎は「風説」を聞いた八日後には、事件当地で発行されている「熊本新聞」について、同年十一月十日に「熊本新聞電報故事情不委 其内探訪郵便等ニ而委敷可有之」と言及している。事件以前に「熊本新聞」に関する記述はなく、竹斎は熊本での事件をきっかけに、同新聞について言及し、

事件の情報をより詳しく知るために、当該地域の新聞を取り寄せたようである。これは、竹斎の事件への関心の強さを物語ると同時に、事件をより詳しく知るために、新聞を選び、使い分けるといったたかな新聞読者の姿をあらわしている。竹斎は、その後も熊本での事件の続報を求めていく。

熊本山口県下暴動其外共大戦争有之由今日四日六日新聞二見（明治九年十一月十三日）

熊本新聞来ル（明治九年十二月三日）

西海 熊本新聞四号 代十銭遣ス（明治十年二月十八日）

よみうり廿五日分 日報廿四日夜前配達ニ（略）西郷桐野村田討死見込よりもろく官軍大勝利傷者□^{ノズカ}二八九人死者なし 廿四日追々諸所より電報廿四日朝より四ツ頃迄ニ戦争等有之何れも伝聞ノ如シ（略）右むら木平吉本宅へ持参両家江も廻ス」（明治十年十月一日）

ここに名前のあがっている「西海新聞」^(注22)も、長崎県で発行された新聞であり、「熊本新聞」と同様に、事件の現場にほど近い情報メディアであった。また、明治十年十月一日の日記にあらわれる「日報」とは、「日報社」を指していると思われる。同社は、西南戦争において唯一従軍の許された福地桜知が記事を書いていた「東京日々新聞」を発刊している。

このように竹斎は、事件当地の新聞や、東京でも具体的な記事を記述しえた「東京日々新聞」を取り寄せるなどして、それぞれの新聞を使い分け、知識を総合して吸収し、松阪射和から遙か遠い熊本で起きた一大事件を知ろうとしていたのである。

三 発信者としての竹斎

ここまで、新聞受容者としての竹斎の姿を見てきたが、竹斎は受容者であると同時に、射和地域における強力な情報発信者でもあった。以下では、竹斎が収集した情報を、地域の人々へどの様に発信していたか、またそのことにより、地域の人々と明治新政府との媒介者としての竹斎の姿を検討していきたい。

竹斎は、すでに安政元（一八五四）年に自宅近くに射和文庫を造り、地域の人々に様々な情報を提供していた。前述したように同文庫について検討した細井は、藩政期に「富裕層間の血縁的なものも含めた人的な紐帯」により集った人々の中で読書会や歌会などが開かれており、こうした人々を基盤に、新聞を回覧する「社」^(注23)がつくられ、「新聞講釈」が行われていたとしている。

ただ細井は、「社」の中での新聞受容についてこのように言及しているが、それ以外の人々の新聞受容についての検討はそれほどされていない。本稿では、こうした細井の主張

をふまえながら、具体的にどのような人々に新聞が受容されていたのかについて、明らかにしていきたい。

竹斎が様々なネットワークを駆使して集めた新聞とその情報は、特定の富裕層である「社」内での回覧に留まらず、竹斎自身によって、射和地域にもたらされていく。例えば次のような記事がある。

「県下当国飯高郡射和村人ノ投書」

我射和ノ里ハ竹川竹斎翁若年ヨリ文事開化富国強兵ヲ冀望シ文庫ヲ営ミ(略)憂国ノ念ヨリコトニフレ思ヲ述内外ノ新聞ハ開化ノ捷徑ナリトテ旧幕ノ時ヨリ諸種ノ新聞ヲ搜索アルニヨリ(略)社中回看後社外有志ノ人へ貸読セシメ改曆徴兵等ノ 詔書ヲ始田畑検査其餘御布令縣廳ノ告諭都テ 朝旨ヲ衆庶ニ貫通セシメント或ハ村中ノ者ヲ寺ニ集テ話シ或ハ六ノ日一ノ夜射陽書院ニ講ス故ニ我村ハ一般新曆ヲ遵法シ他所ノ如ク一月末ニ年祈參宮或ハ門松ヲ飾餅ヲ搗二月四日追儺ヲ行フ様ノ頑固更ニナシ(略)

左ノ書目ヲ書院門前へ掲ケ五日ヲ限り借読ヲユルス其他和漢ノ書及翻訳書亦同シ

太政官日誌 行在日誌 東巡日誌 集議院日誌 鎮臺日誌 市政日誌 (以下略)

「度会新聞」明治六年四月

この度会新聞に寄せられた「県下当国飯高郡射和村人ノ投書」からは、新聞が「新聞同観結社」の社中回看後、「社外有志ノ人」へと貸し出されていたことがわかる。しかし、明治初年代の識字率は、男子が四十〜五十%、女子は十五%に留まると考えられており、どの程度の人が実際に新聞読者になり得たかは疑問である。

このように、竹斎は新聞を読むことのできない人々に対しても、「朝旨ヲ衆庶ニ貫通セシメント」して、新政府の命令である「朝旨」について、口話による「講釈」を行っていたという。例えば、竹斎は「村中ノ者ヲ寺ニ集」めたり、「射陽書院ニ講」を行う等をしたため、「村ハ一般新曆ヲ」一月末に祝うような「頑固」な人がいなくなつたとされている。

投書の中の竹斎は、村人を集めてその講釈を行うことで、人々の日常に浸透していた曆を捨てさせて、太陽曆へと「改曆」させていく情報発信者、指導者としての姿が描かれている。こうした竹斎の姿は、彼自身の日記にあらわれる「新聞講釈」や「改曆講釈」といった記録からも見ることができ、さらに竹斎は、「延命寺へ横浜と絵入り新聞かし遣 今夜説教故也」(明治八年十一月十四日)と、地域の寺に説教の

素材として新聞を貸し出すなどしている。

ところで、藩政期に射和文庫に集った「社」では、『万葉集』や『伊勢物語』、『源氏物語』等の講釈が行われていた。

血縁関係を中心として、学問研究をもとに修めるといような結びつきは、近世の商人の間ではごく一般的に行われてきたことである。^(注26) こうした中で、竹斎も同じく講釈や歌会などの催しを「社中」において定期的に行っている。

今日射和寺歌会 万葉 源氏講尺（文政九（一八二六）年三月六日）

今昼時より社中出席 いセ物語講尺（天保六（一八三六）年六月十一日）

しかし、こうした講釈は、「社中」を中心としたメンバーのみでなく、時に村人を対象として行われていた。

今夜於蓮生寺道話 大学ト孝経ヲ台ニして道話有之 夕刻後より鐘ニ而人寄今夜聴衆貳百人たらず有之（天保十五（一八四五）年九月十日）

昼前本家ニ而講有之 昼後蓮生寺ニ講席子供其他大人も少々有之 夜ニ入同所講席 今夜は人数相増貳百五十人ニも及申本堂一はい有之（天保十五年九月十一日）

村内の寺などで、「貳百 人たらず」から「貳百五十人」という大人数を相手に、『大学』『孝経』などの、儒教のテキストを使い、「道話」が行われている。人数からして、限定

された「社中」にとどまらない大規模の講釈が行われていたと見られる。竹斎がこれらの会の話者であったかは必ずしも明らかではない。だが記事からは、地域で二百人から二百五十人程度が集まり、学習するという様子が見られ、これらの会はやがて明治期に見られる「新聞講釈」や「改暦講釈」を、寺や書院などで聞き、学ぶという素地となったと考えられるのではないだろうか。

まとめ

そもそも、安政以後の日記に登場する新聞は、「異船」「露西亞」「海防」「英夷」といった言葉と共に、日記に登場する場合が多い。これは、日本各地に現れた諸外国船の脅威が、もともと国学に縁の深い家に生まれた竹斎に、あらためて「日本」を意識させたと考えていいものと思われる。そうした中で、竹斎は情報を集める手段として、新聞を利用し始める。

竹斎が上野での戦争や熊本暴動等の事件の中で、新聞の有用性を見出し、積極的に収集するようになっていくのは、見てきたとおりである。そして、集められた新聞情報は「社中」という一部の階層に留まらず、竹斎の講釈を通じて射和地域に浸透させられていった。それは、同じ村民の投書に見られるように、「朝旨ヲ衆庶ニ貫通セシメント」という意識に基づいていた。竹斎が改暦の講釈をしている事からも分か

るように、それは明治政府の開化啓蒙の方針と異なるものではなかった。

射和地域の新聞受容者層とは、藩政期「社中」のメンバーをそのままスライドさせて、連続したものと考え事はできない。竹斎による「新聞講釈」や、新聞を用いた「説教」等を受容して、直接的に新聞を読むのではなく、新聞を聴き、開化に足を踏み入れていく人々もまた、射和における新聞受容者層である。そして、地域が開化していく素地には、新聞とその内容を人々に説明しうる指導者と、それを受け入れる人々の知的レベルの高さがあったのではないだろうか。そうした素地の一つに、文政や天保の時期から地域住民に対して行われていた「講席」があったのではないかと思われるが、この「講席」の詳細については、また稿を改めて論じたいと考えている。

- (1) 山本武利『近代日本の新聞読者層』（法政大学出版局 一九八二）
- (2) 小野秀雄『日本新聞史』（良書普及会 一九四八）
- (3) 註1に同じ。
- (4) 情報を通じて地域社会を照射しようとする研究には、太田富康「幕末期における武蔵国農民の政治社会情報伝達」（『歴史学研究』一九九一・一一）や、宮地正人「幕末政治過程における豪農商と在村知識人―紀州日高有田両郡を視座として―」（『日本近現代史―維新変革と近代日本』岩波書店 一

九九三）などがある。

- (5) 日本における新聞の登場について、佐藤考は「幕末期、特に海外情報に対する関心の高まり」（『地域社会と新聞―幕末期開港場の新聞を中心として』保谷徹編『幕末維新と情報』吉川弘文館 二〇〇一）によるものであったとしている。竹斎の日記でも、「新聞」という語は、特に初期の文久から慶応にかけての多くが、異船の情報、海防の情報とともに登場している。

- (6) 平凡社編『三重県の地名』（平凡社 一九八三）
- (7) 竹斎個人に関する研究としては、生い立ちや家族構成、文庫の設立や射和での事業、幕府要人との交流などを検討したものが多い。代表的なものとしては、山崎宇治彦 北野重夫編纂『射和文化史』（射和村教育委員会 一九五八）、松阪市文化財保護委員会 竹川竹斎観光委員会編『竹川竹斎』（竹川竹斎百年祭実行委員会 一九八二）、上野利三『幕末維新时期伊勢商人の文化史的研究』（多賀出版 二〇〇一）などがある。
- (8) 山崎宇治彦 北野重夫編纂『射和文化史』（射和村教育委員会 一九五八）や、中井良広の「明治前期、竹川竹斎と射和文庫」（篠田弘監修 井上知則 加藤詔士 高木靖文編『歴史の中の教師・子ども』福村出版 二〇〇〇）、細井岳登『射和文庫研究序説』（『図書館文化史研究』二〇〇〇）などがある。
- (9) 岩猿敏生『日本図書館史概説』（日外アソシエーツ出版 二〇〇七）
- (10) 小野則秋『日本図書館史 補正版』（玄文社 一九七三）
- (11) 細井岳登『射和文庫研究序説』（『図書館文化史研究』二〇〇〇）

(12) 風説留が、「新聞」としてされる事例については、宮地正人により論じられている。宮地正人「風説留から見た幕末社会の特質」〔『幕末維新期の社会的政治史研究』岩波書店一九九〇〕。

(13) 井上能孝『箱館英字』見て歩き候もし箱館に黒船が来なかったら……〔五稜郭タワー発行二〇〇二〕

(14) 日本国語大辞典第二版編集委員会小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典第二版』(小学館二〇〇一)

(15) 「内外新報」慶応閏四(一八六九)年四月十日創刊。安井勳次、鈴藤祐次郎、橋爪貫一により創刊されたと考えられる佐幕派の新聞。(北根豊編『日本初期新聞全集』ペリかん社一九八六二〇〇〇)より。

(16) 「横浜新聞紙」は、「日本貿易新聞」や「日本交易新聞」、「横浜新聞」「神奈川新聞紙」などと題するが、一般的には「日本貿易新聞」と称されている。「ジャパン・コムマーシャルニュース」をもとに、その訳本として出されたが、当初題号などはされておらず、発行年月の最も古いものは文久三(一八六三)年三月である。翻訳者は蕃書調所関係の洋学者であった柳河春三や、箕作貞一郎、渡辺一郎などであった。

(17) 「もしほ草」慶応四(一八六八)年閏四月、米国人ヴァン・リードが、岸田吟香と共同で横浜居留地にて発行。〔日本初期新聞全集〕(前掲)。

(18) 「萬国新聞紙」慶応三(一八六七)年一月、イギリス領事館付牧師のペーリーが横浜にて創刊。「邦字新聞紙の祖ともいふべきもの」〔『幕末明治新聞全集 第二巻』明治文化研究会編 世界文庫 一九七三一九七四〕。

(19) 「太政官日誌」か。慶応四年二月創刊。『日本初期新聞全集』(前掲)より。

(20) W・J・オング 桜井直文 林正寛 糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』(藤原書店一九九二)

(21) 山本文雄は「明治初期における新聞の普及状況」(『新聞学評論』一九五九 日本マス・コミュニケーション学会編)において、「幕末から明治にかけては、多くの新聞が創刊されたが、多少でも全国的に領布されるようになったのは、明治五年からである」としている。

(22) 「西海新聞」以文会社出版。明治九年九月、「長崎新聞」の後身として発刊される。明治一五年一〇月廃刊。

(23) 註10に同じ。
(24) R・P・ドーア 松井弘道訳「徳川教育の遺産」(マリウス・B・ジャンセン編 細谷千博編訳『日本における近代化の問題』岩波書店一九六八)

(25) 「昼後於延命寺太陽曆講尺」(明治五年十一月十八日)「夜御布告新曆講尺人々来表門脇へ新曆比較掲ケ置」(明治五年十一月二十一日)、「今夜婦人其他男子も来改曆講尺」(明治五年十二月二十日)、「夜御布告新曆講尺人々来表門脇へ新曆比較掲ケ置」(明治五年十一月二十一日)等がある。また改曆とは別に、児童に町割りについて説明していた「十一時頃より出校小児説諭いせ国飯の郡射和村いさわ神社町割字等之事説きかす」(明治十一年一月七日)もみられる。

(26) 横田冬彦「近世の学芸」(歴史学研究会 日本史研究会編『日本史講座六近世社会論』東京大学出版会二〇〇五)や、同じく横田冬彦「書物をめぐる人々」(『知識と学問をになう

人々』吉川弘文館二〇〇七）等の研究が見られる。
（しまさき・さやか／名古屋大学大学院）